

図書館だより

第 50 号

平成 9 年 9 月 30 日
愛媛大学附属図書館

目 次

図書館のことをもっと知ろう…………… 1	新着図書コーナーを設置…………… 9
第 1 号を手にとって…………… 2	図書の購入手続きを早目に！…………… 9
情報・知識・智慧 —大学図書館の役割— …………… 3～4	本館の開館時間を延長…………… 9
館長室の屏風今昔…………… 5～6	OPACの運用時間を拡大…………… 9
平成 8 年度科学研究費補助金の研究成果 報告書…………… 6～7	附属図書館委員会…………… 10
遡及入力実施状況…………… 8	図書館業務用電子計算機システムの更新 について…………… 10
平成 8 年度学術情報検索システム利用件 数統計…………… 8	医学部分館にプリペイドカード方式複写 機を設置…………… 10
平成 9 年度愛媛大学体験入学…………… 9	図書館日誌(会議, 研修)…………… 10
	人事異動…………… 10

図書館のことをもっと知ろう

鮎 川 恭 三

私が、工学部の機械工学科の研究室にいた頃は、附属図書館とのお付き合いは、いろいろな学術雑誌や図書を探しに、暗い書庫の中をうろうろした上で、コピーをとらせてもらったり、研究室にある本や雑誌に係りの方が借り受けに來られたりといったことが殆どでした。いつのことか、図書館の閲覧コーナーが随分居心地が良いことを発見し、新着の学術雑誌から必要な情報を探すことを口実に、時折、仕事の場としていたこともあります。

この度、“図書館だより”に寄稿するようにとのことで、「愛媛大学附属図書館概要」に目を通し、また、附属図書館のWWWホームページをとくと拝見して、仕事だけでなく、なぜもっと図書館を楽しまなかったのだろうかと悔やむことしきりです。百万冊を超す蔵書と一万四千種に及ぶ雑誌をもち、多くの業務が電算化され、様々な情報をいろいろな形でサービスしてくれる図書館は宝の山です。貴

重な図書や大型コレクション等もあり、教育・研究に役立てるだけでなく、快適な閲覧コーナーで、いろいろな本に囲まれて、心をリフレッシュする場としても大いに利用してくれば良かったと思っています。

所蔵している図書などの資料の検索にオンライン利用者用目録(OPAC)のシステムを整備し、学内LANを利用して研究室端末からも検索でき、留学生のために英語版もできたとか、また、週1回データの更新をしておられる由、ここに至る関係者のご苦勞は並大抵のものではなかったと思います。平成2年には、学術情報センターの学術情報ネットワークの中継拠点も本学に設置されました。また、昨年には、ネットワーク対応型の学術情報検索システムが導入され、学内LAN接続の研究室端末から24時間複数同時アクセスできる検索サービスが提供されることになりました。利用可能なデータベースが医学関係、

農学関係と現在のところ限られていますが、今後の発展が期待できます。このように、附属図書館は、研究・教育を支援する情報サービスの中心としての機能を充実しつつあります。

一方、愛媛大学附属図書館は、早くから開かれた図書館サービスを目指して、地域の一般市民の方々も利用でき、開館時間も平日12時間で、土曜、日曜も開館するなど、オープンな図書館として全国的にも有数のサービスを続けてきています。

長年、学内にいて、図書館のサービスを当然のことと思い、「愛媛大学附属図書館概要」と附属図書館のWWWホームページにまとめられた図書館の状況をつくられた、図書館の関係者のご苦勞を、実感することなく過ごしてきた自分が恥ずかしく、その反省を込めて、図書館の様子を紹介させていただいた次第です。

これからの図書館は電子図書館的機能の充実が求められてくるようになると言われていきます。附属図書館も、マルチメディア時代にふさわしい情報発信拠点として、その機能をますます整備していくことになると思います。その整備に向けて、これからも、図書館関係者のご苦勞は続きます。勉強や研究に図書館をいろいろと利用してきましたが、図書館のサービス内容をもっと知って、利用できるいろいろな形を考え、また、提案させていただくことが、関係者のご苦勞に報いることになるのではないかと今考えている次第です。

先の“図書館だより”で小西附属図書館長が幾つかのお願いを述べておられます。このお願いにぜひ目を通していただき、これからの図書館がますます充実したものとなるようご協力をいただきたいと思います。

(あゆかわ きょうぞう 学長)

第 1 号 を 手 に と っ て

小 西 永 倫

今回はこの『図書館だより』が第50号ということである。

「第1号はいつ出たのだろうか」と思ってこの図書館の「学術情報係」が用意してくださった資料をめくってみると、それが昭和51年12月1日発行であることがわかった。西暦では1976年である。とすると、この発行日誕生の方は、ちょうど満20歳になっているはずである。そして満20歳といえは、多くの本学3回生または4回生ぐらいの年齢だろうか。50号、50回といった数字をこうして、20歳、3回生、4回生という具体的イメージにおきかえてみると、この『図書館だより』が誕生から青春の真っ只中に、いや分別ある社会人、良き市民への門出の年齢に達していることがよく見えて、何はともあれ、その順調な成長を祝し、「育ての親」の方々への感謝を述べさせていただきたいと思う。

また、どのようなささやかなブックレットでも、その創刊号には期待と抱負がにじみで

ているものである。こう思ってもう一度、第1号を手にとってみると、巻頭言をよせておられる当時の芦田譲治学長が、「これによって(つまりこの『図書館だより』によって)、図書館についてのコミュニケーションがよくなり、図書館が教育と研究に、一層生き生きと利用されるようになることを期待するものである。」と、その巻頭言を結んでおられるのが目にとまる。また時の館長は、お優しい国語国文学の先生、その頃の教育学部教授であられた、今は亡き蒲池文雄先生であったことがわかり、先生は「この館報発行を機として、全学のみなさんが図書館に対していっそう深い関心を持たれ、その充実と発展のためにご協力とご指導をたまわりますようお願いできません。」とお言葉をよせておられる。これら芦田学長の「期待」に、蒲池館長の「願い」に、はたして応えてこられたのだろうか、一瞬心もとなくもなるが、この「初心」を忘れないようにすることが大切であろうと思う。

また以上お二人のほかに、ご寄稿くださっている教官として、法文学部の横山昭市先生、農学部の徳増智先生が目にとまる。それぞれに当時大活躍されていた先生方である。

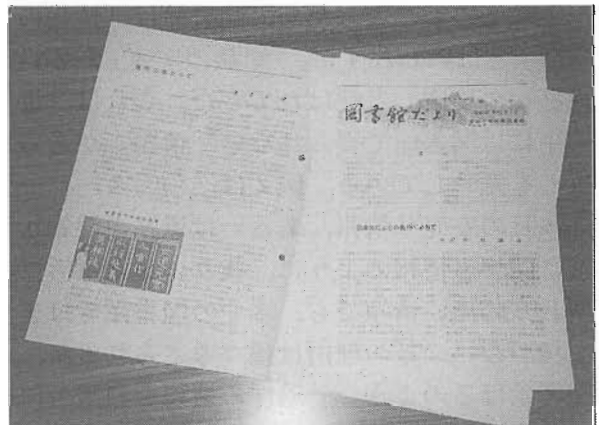
一方、ことに「大学図書館」という巨体は、司書の方々を中心とした「専門家集団」の、舞台裏での周到的な舵さばきがあつてこそ、辛うじて前に進みうる所なのだと痛感させられているこの頃であるが、当時の「受入係」、「閲覧係」、「参考調査係」そして「農学部分館」と「医学部図書館」の各々が、まさに「所を得た」とばかりに、それぞれの角度からの原稿をよせておられる。

このビジネス・サイドのご寄稿から一つおもしろいことが目にとまった。農学部分館の「教官のために」という副題を付した寄稿のところで気がついたのであるが、「洋書(単行本)納入価格」の案内の中に「1ドル標準販売価格370円、納入価格351円50銭」というのがそれである。つまり、まさに当時は「1ドル360円」と言われていた頃なのであったのだ。そして一つ、この第1号にどうさがしても見

つからない言葉がある。それは「電子図書館」という文字である。最近の図書館関係の資料は、この「電子図書館」関係の記述で埋めつくされているといっても過言ではないだろう。その点ではまさに今昔の思いがする。

さて、この「電子図書館」関係の文字がないことに、本当にほっとすると言ったりしたら、総スカンを喰らうであろうか。

(こにし えいりん 附属図書館長)



図書館だより 創刊号 昭和51年12月1日発行

情報・知識・智慧 ～ 大学図書館の役割 ～

郡 司 良 夫

「情報」という言葉が、巷に溢れている。そして、図書館は「情報を提供する場」と最近では考えられているようである。

しかし、そんなに古いことではないが、嘗て図書館は「知識の宝庫」という言い方をされていた。「情報の宝庫」とは決して言われなかった。してみると、「情報」と「知識」とは別物であると考えていいであろう。

では、誰もが気軽に口にしている「情報」とは一体何であろうか。そして「知識」とは。「情報」という言葉は英語のinformationに対応する訳語であろう。もう2ヶ月ほど前のことになるが、台風のために特急列車が途中で運転を中止し、そこから先は各駅停車の普通列車に乗り換えるよう、車内放送があった。運悪く筆者もその列車に乗っていた。車内放

送を聞いていたので、とにかく行けるところまで行ってみようと思った。その普通列車は目的地のずっと手前までしか行かない。そこから先はまた別の列車に乗り換えれば行ける、という車内放送に安心していった。ところが、この列車の終点に着いてみると、乗り換えできるはずの列車は当分運休だという。駅員の放送は「運転再開の情報が入り次第お知らせします」というものだった。つい最近(といっても、昨日のことではないが)までは、「連絡が入り次第」といったもので、わざわざ「情報」という正体不明の言葉は使わなかった。

今日、「情報」という言葉は便利である。しかし、元々は「ある事実を知らせること」であろう。また、「情報」と日本語に訳されるものにintelligenceというのがある。これは個々

に集まってきた情報(information)に判断が加わり、再構成されたものを示すようである。C I AのIである。

では、「知識」とはなんだろうか。英語のknowledgeに相当するわけだが、集まってきた情報を判断し、組織化し、ある体系に組み立てたものを指すようである。そして、この知識が新たな情報を生み出すことになり、それがまた新たな知識となる。

上にも書いたことだが、図書館は「情報の宝庫」とはいわれずに、「知識の宝庫」あるいは「知の宝庫」と呼ばれてきた。これは、世の中には図書館で得られない「情報」があることを意味している。例えば、〇〇スーパーの本日の安売り情報、あるいは道路の混雑状況に関する情報のように、我々の日常生活に関わりの深い情報でも、多くの図書館ではまず扱わない。その理由は種々考えられるが、図書館はこのような一過性の情報を利用者に提供することに向いていないといえる。英国のBLDSCの基礎を築いたD. アーカートが『図書館業務の基本原則』の中で、「図書館は利用者が利用したい記録類を利用できるようにしておかなければならない。」(基本原則5)と指摘しているように、図書館で提供するものには利用者がアクセスできる手がかりを付加する必要がある。また、一過性の情報を収集し提供する体制ができていない。

人間はもともと我が儘で、気紛れなところがあるから、その日の天気予報、列車や飛行機の空席情報およびその予約、列車や飛行機の中で読みたいと思っている本の貸出状況等、その人のほしい情報をすべて図書館で手に入れたいと思い、それに応えられない図書館に不満を持つこともあろう。しかし、このような情報を利用者にすべて提供するのが図書館の役割だろうか。図書館は提供する情報に責任があるわけで、ここに示したような一過性の情報に関して、本来的に図書館が責任をとれないのは明らかである。しかし、今日の通信技術を駆使すれば、こうした個人の欲望を満たせないわけではないが、だからといって、図書館がこうした機能を備えなければ

ならないということにはならない。

世の中の動きは、文字記録からデジタル化へ向かっている。その中にあって図書館の役割は何か。筆者は『図書館サービスの再構築』の著者、M. K. バックランドの考えている図書館の役割に今のところ賛成である。これまで図書館が集めてきた蔵書をすべて電子化することを彼は考えていない。紙に印刷された文献はまだ当分の間存在し続けるであろうが、デジタル化された文献は次第に増加して行くと考えられるので、そうした新しい形態の文献を図書館サービスにいかに組み込んで行くか、というのがこれからの図書館の課題である、とも言っている。

ここで大学図書館について少し検討したい。大学図書館の役割あるいは機能について、これまでは学習図書館機能と研究図書館機能という二つの面から考えられてきた。しかし、今後はさらに電子図書館の機能を加えることになろう。ここでいう電子図書館の機能は、上記の二つの機能のどちらにも関わりを持つので、それらと並列する機能ではない。現在、いろいろな形で電子図書館の試みがなされているが、その多くは研究者を念頭に置いたものといえる。大学図書館にはもう図書は必要ない、最新の情報を提供してくれればいいというものや、いわゆる「図書館」はもう必要ない、情報の所在さえ案内してくれればいいといった極論もあるようだが、果たしてそうだろうか。大学では学生への教育が大きな比重を持っている。学生はいきなり最先端の情報で教育されるわけではなく、基礎的な知識(基礎的な「情報」ではない)を身につけることを求められている。学習図書館機能の強化が求められる由縁である。この点についていえば、今年度国立大学図書館協議会から文部省へ提出された要望書の第1番目の要望事項が「学生用図書購入費の増額」となっていることからわかるように、わが国の大学図書館の学習図書館機能は貧弱であることが分かる。一方、研究図書館機能については、研究図書館＝電子図書館ではないことに注意を喚起したい。研究図書館機能は従来のものに電子図書

館「的」機能を付加することで強化して行かなければならない。当面は「電子図書館」そのものへの脱皮ではなく、電子図書館「的」機能の追加である。

そこで問題になるのは、この電子図書館的機能をどのようなものと捉え、どのような形で現在の図書館活動に取り入れて行くかということである。上で言及したバックランドは、「電子図書館」の章で電子文献への図書館の対処方法が従来のやり方と変わらないことを指摘し、同時に、紙メディア文献と電子文献の共存も指摘している。嘗て、文献のマイクロ化の神話が図書館界に投げかけた光明が、結局神話で終わってしまった二の舞を演じてはならないだろう。

最後に、表題に出している「智慧」であるが、これは英語のwisdomに当たるものと考ええる。この「智慧」は図書館が利用者に提供できるものではない。智慧は与えられるものではなく、各人が引き出すものだからである。図書館は利用者に情報や知識を文献(印刷媒体に限らない)という形で提供することはできるし、これまでも提供してきた。利用者はそこで得られた情報や知識を血肉化すること

によって、それぞれに合った形で発露するのが智慧というものであろう。この世には、知識にまで至らない情報があり、智慧にまで至らない知識がある。

長々と書いてきたが、今日の通信技術の状況を考えると、従来かなり明確に分かれていた博物館、美術館、文書館、図書館というものの仕切が不透明になりつつある。しかも、その他の一過性の情報までも扱えとなれば、もはや図書館にこだわる必要はないといえるかもしれない。しかし、図書館は存続しなければならない。それも「知識の宝庫」として。さらにいえば、これまで実現することの難しかった分担収集による個性的な図書館として、図書館の連携を一層強化する必要がある。その為には、印刷された文献、デジタル化された文献を含めて、図書館が主体的に関わるのはこれまで扱い慣れてきた文献情報の集積と提供に限定した禁欲的な態度が必要であろう。

(ぐんじ よしお 事務部長)

参考文献

D. アーカート著 高山正也訳
図書館業務の基本原則 勁草書房 1985
M. K. バックランド著 高山正也、桂啓壮訳
図書館サービスの再構築 勁草書房 1994

館 長 室 の 屏 風 今 昔

図書館だより第1号に館長室の屏風の記事があります。以下その記事の一文です。

「館長室にはいるとまず目につくのが四曲の大きな屏風です。高さ2m、幅2m33cm、そのうえはってある拓本の字が雄偉(1字の大きき30cm～45cm角)なのです。(中略)

字は中国山東省は泰山の経石谷の岩面に、6世紀の半ばごろ彫られた金剛般若經の文字の拓本。それを、大正初年に山東省青島の守備司令官だった由比光衛大將が入手、その弟の松山高等学校初代校長由比質氏に贈った。由比校長は漢文の大江文城先生に、1字ずつばらばらだった拓本を組み立てて文句らしいものにするのを頼んだ。大江先生が苦心した結果できた名文(?)によって2双の屏風ができたが、一方は戦災で焼け、一方が武智雅一元館長の斡旋で館長室に納まることになった

次第。それにしても、文城先生のご苦心の作、さて何と読むものでしょうか。」

世道无常 人當作 以行他義 莫相後

20年の歳月を数え50号を迎えた今日これに應えるが如く、元館長で創刊号にも寄稿されている蒲池先生が書かれた「館長室の屏風について」の記事を見つけました。なにか因縁めいたものを感じつつその記事を紹介することにいたします。

「では、今ある屏風の字は何と読むのでしょうか。私は、高校の国語の先生を志望している学生を連れて来て、これを読んでみろ。これくらいが読めんでは高校の先生はおぼつかないぞなどと脅迫していますが、大江先生がモザイク的にくみたてたのだとすると、ちゃんと読める方が変なのです。でも何とかごまかしてツジツマをあわせるのが商売ですからコ

ジツケの一例を示しましょう。以下本気にしないで下さい。

世道(せどう)常(つね)ニ无(な)シ
人(ひと)當(まさ)ニ作(な)スベシ
他義(たぎ)ヲ行(おこな)フヲ以(もつ)テ
相(あい)後(おく)ルル莫(なか)レ

世の人のふみ行うべき道は、これこれときまって動かぬものがあるわけではない。だから人は、めいめい自分で自分の生きる道を工夫しなければならない。それをしないで、他人のきめた道を行うことに汲々としていると、人におくれをとってしまうことになる。どうやら自律律往を勧めた文になるようですが、少々無理ですかね。一九七五・一・二三

愛媛大学附属図書館館長室で 蒲池 記

蒲池元館長の名解釈は20年を経た今日でも、色あせることなく図書館の今後の指針を示しているようです。この屏風は現在本館3階貴重図書室にあります。



創刊号掲載時：図書館長室



現在：貴重図書室

平成8年度科学研究費補助金の研究成果報告書

本学における平成8年度科学研究費補助金の成果報告書を図書館に備え付けました。

利用については資料サービス係へお申し込みください。

()内は課題番号

基盤研究(A)(1)

島狐高温型変成帯の形成過程と上昇テクトニクス

研究代表者：小松正幸(06302029)

農業生産を智能化する幾何学的認識システムの開発

研究代表者：橋本 康(06506002)

中国・四国地域の資源、生産、高齢化社会に関するデータベース確立のための基礎的研究

研究代表者：三木吉治(07309011)

基盤研究(B)(1)

早期産褥期の授乳環境における褥婦の精神活動に関する情緒工学的基礎研究

研究代表者：後藤幸子(06559015)

基盤研究(B)(2)

微小血管からの酸素放出動態の2次元イメージングに関する研究

研究代表者：前田信治(06557002)

らせん構造集合ポリペプチドの創成と膜分離機能

研究代表者：井上賢三(07455376)

急性薬物中毒における呼気のフーリエ変換赤外分光法(F T I R)分析

研究代表者：白川洋一(07457358)

試験研究(B)(2), 基礎研究(B)(2)

イノシトール類の製造研究

研究代表者：尾崎庄一郎・古賀理和
(07554030)

基盤B2試験

爆発圧縮法を用いた粉体の高密度成形に関する研究

研究代表者：西田 稔(07555523)

基盤研究(C)(2)

「童謡」と熒惑星伝説の基礎的研究—後漢以後における讖緯説の展開

研究者代表：串田久治(06610017)

学習場面における児童の努力に対する肯定的感情の獲得に関する研究

研究者代表：渡部弘純(06610121)

S波中間子—2核子3体系の理論的研究

研究者代表：上田 保(06640402)

地球内部物質の弾性率の圧力変化の測定

研究者代表：大野一郎(06640547)

地方小都市における道路網計画のためのOD予測・配分手法の開発

研究者代表：朝倉康夫(07555456)

受領制度を通じてみた平安時代国家財政史の研究

研究者代表：寺内 浩(07610335)

13—4世紀の東北ユーラシアの言語状況が中期蒙古語に及ぼした影響の研究

研究者代表：樋口康一(07610515)

西洋法継受と近代日本の形成—ローレンツ・フォン・シュタインの資料的研究を通じて

研究者代表：宇都宮純一(07620003)

レプトンの世代混合と質量行列の系統的研究

研究者代表：谷本盛光(07640413)

瀬戸内地域の中新世酸性火山岩の起源

研究者代表：田崎耕一(07640605)

高等植物細胞の間期における核小体形成部の3次元構築に関する研究

研究者代表：佐藤成一(07640884)

ニューロン状導電性高分子の合成とその機能素子としての特性の研究

研究者代表：大西秀臣(07650377)

交通需要管理計画から見た都心居住の研究

研究者代表：柏谷増男(07650626)

TiおよびNi基合金における規則格子相析出機構

研究者代表：仲井清眞(07650771)

VA菌根菌の生長促進物質の探索と人工培養

研究者代表：石井孝昭(07660040)

森林再生のための侵食防止と樹林形成資材の開発・利用に関する研究

研究者代表：江崎次夫(07660197)

水資源問題に関わる農林地機能の定量的評価

研究者代表：高瀬恵次(07660324)

老年期のアクティブライフとQOLの確保に関する追跡研究—ベースライン調査

研究者代表：新開省二(07670444)

C型肝炎ウイルスの持続感染に果たすリンパ性樹状細胞の役割

研究者代表：恩地森一(07670597)

氷温保存(−1℃)における長時間心保存の臨床応用に関する研究

研究者代表：河内寛治(07671485)

実験的骨粗鬆症における骨代謝関連蛋白のmRNAの発現

研究者代表：奥村秀雄(07671597)

Insulin resistanceが排卵に及ぼす影響に関する研究

研究者代表：北川博之(07671792)

ヒト精子プロゲステロン結合能と受精能との関連についての研究

研究者代表：矢野樹理(07671793)

新しいfingerprinting法による多発癌の解析と転移特異遺伝子変異の同定

研究者代表：木花敏雅(07671794)

声帯粘膜波状運動に関する実験的研究

研究者代表：湯本英二(07671862)

マラリア原虫伝搬阻止単クローン抗体の標的蛋白の発現様式と伝搬阻止機構の解析

研究者代表：鳥居本美(07670279)

アクセシビリティを考慮したQOLの評価に関する研究

研究者代表：藤目節夫(07680167)

高波の継続時間を考慮した波高の極値推定法に関する研究

研究者代表：畑田佳男(07680491)

ダム湖における春の環境条件に基づく夏のクロロフィルa濃度の経年的変動の予測

研究者代表：香川尚徳(07680557)

重点領域研究1

有機結晶環境下での反応設計

研究者代表：戸田英三夫(06242104)

遡 及 入 力 実 施 状 況

附属図書館では、平成8年度和図書15,000冊を遡及入力しました。これにより入力データの総数は366,000冊となり、蔵書冊数の41%がO P A C検索可能となりました。

平成8年度末

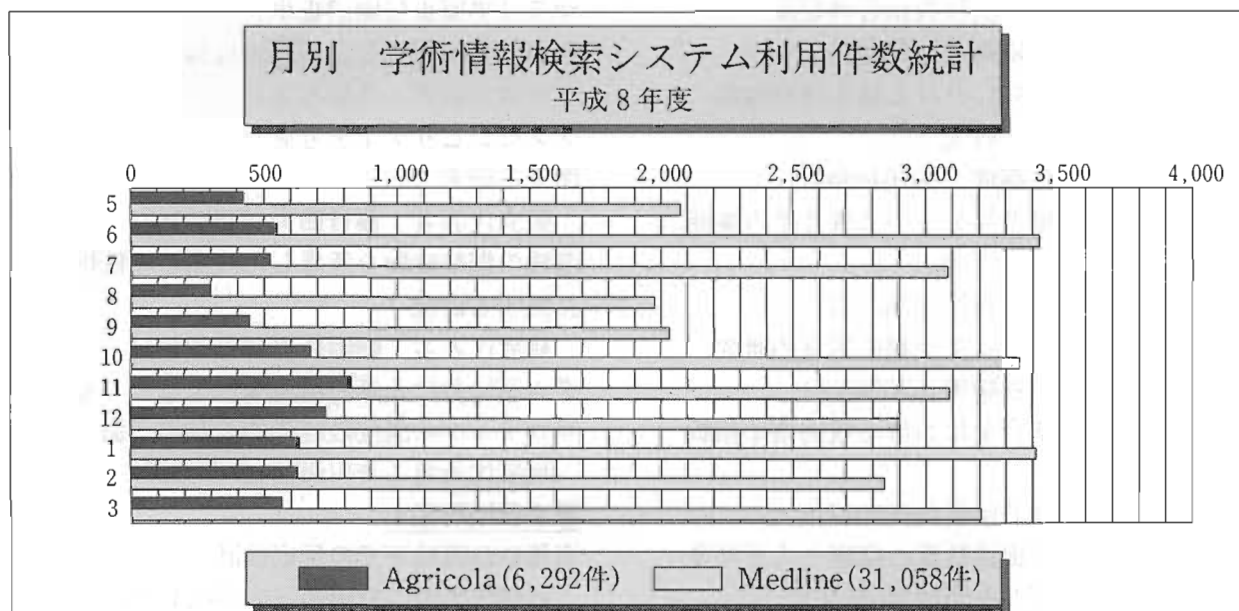
蔵 書 冊 数 1,053,888				
入力済図書冊数 366,028		未入力図書冊数 527,701		入力対象外 160,159
昭和63年度以降 受入図書冊数 259,528	遡及入力済 冊数 106,500	計画の 残冊数 56,500	当面の遡及入力対象外 ・昭和38年度以前受入 ・昭和62年度以前研究室・分館受入	製本雑誌等 ・雑誌で整理
	平成4－6年度 61,000冊 平成7－8年度 45,500冊			

* 入力対象冊数＝蔵書冊数－入力対象外冊数＝入力済冊数＋未入力冊数＝893,729冊

* 遡及入力率＝入力済冊数÷入力対象冊数×100＝366,028÷893,729×100＝40.9％

平成8年度学術情報検索システム利用統計

附属図書館では、平成8年5月より学術情報検索システムの運用を行っております。平成8年度、Agricola(農学系データベース)で6,292件、Medline(医学系データベース)で31,058件の利用がありました。



平成9年度愛媛大学体験入学

愛媛大学では、平成9年8月7日～8日の間、進学を希望する高校生を対象に公開の体験入学を開催しました。附属図書館では、図書館施設見学・情報検索体験を実施しました。体験後のアンケートでは、「専門書が多く勉学に向いている。」「コンピュータを使って探せるので楽でいいです。」「インターネットが体験できてよかった。」などの声がありました。

新着図書コーナーを設置

7月から資料サービス係カウンター前に新着図書コーナーを設置しました。開架図書・参考図書など新しく受入整理されたもののうち、図書館内に配架される図書を一時的に置きます。このコーナーに置いてある図書は貸出しませんが、1週間後に所定の書架に移動しますのでどうぞご利用下さい。

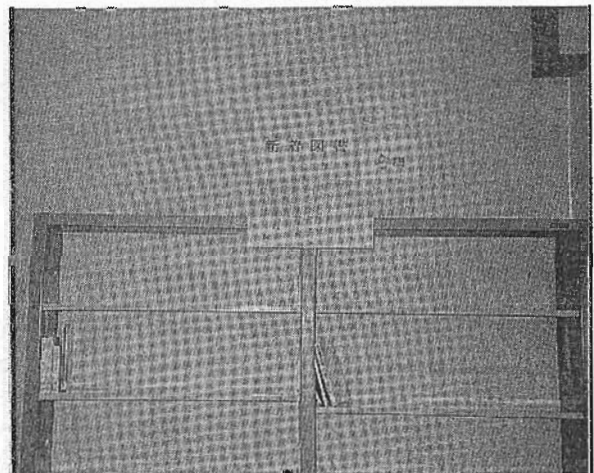
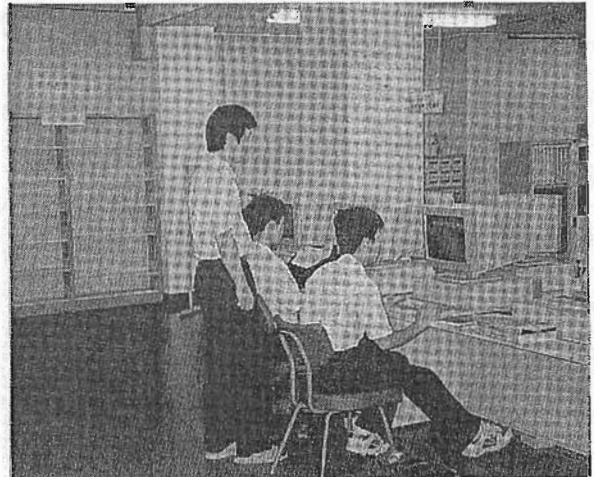
図書の購入手続きを早目に！

附属図書館では、平成10年2月に電子計算機システムの更新を行うのに伴い、10月以降順次データの移行作業等を行います。そのために、一時的に図書館業務の大部分を停止しなければなりません。

なるべく利用者の妨げにならないように計画を進めておりますが、特に平成10年1月から3月にかけてご迷惑をおかけすることになりますので、この点をご理解の上ご了承下さい。

なお、図書の購入整理については、更新時期が年度末近くであることと、システムが大幅に変更されることもあって、更新前後に業務の混乱が生じると予想されます。

そこで今年度に限り、図書の購入手続きを例年よりも早く済ませていただきますよう、ご協力をお願い致します。



本館の開館時間を延長

本館では、10月1日から毎週月曜日(夏季及び冬季休業中、祝・休日を除く)に限り、現在21:00までの開館時間を1時間延長し22:00までとします。

OPACの運用時間を拡大

図書館内でOPACを利用する場合は、開館時間内ならいつでも利用できます。(ただし毎月第3水曜日の9:00～13:00は、総合情報処理センターの定期保守のため利用できません。)

また、図書館外からの利用は総合情報処理センターの保守時間とデータベースの更新時間(毎週火曜日の22:00～8:00)を除いて24時間利用できます。

図書館委員会

平成9年度第1回附属図書館委員会

日時 平成9年6月6日(金) 13:00～
場所 附属図書館視聴覚室(4階)
議事

[報告事項]

1. 学内関係

- 1) 愛媛大学附属図書館電子図書館的機能検討委員会について(中間報告)
- 2) 平成10年度概算要求事項について
- 3) 平成8年度学生用図書を選定状況について

2. 学外関係

- 1) 第45回中国四国地区大学図書館協議会総会について
- 2) 第24回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会について
- 3) 国立大学附属図書館事務部課長会議について

3. その他

[協議事項]

1. 学生用図書の充実方策について
2. その他

図書館業務用電子計算機システムの更新について

図書館業務用電子計算機システムが平成10年2月に更新されます。

新システムの詳しい内容やお知らせは、随時「図書館だより」やホームページ等で行います。

医学部分館にプリペイド カード方式複写機を設置

医学部分館では利用者サービス充実の一環として、7月より2階閲覧室にプリペイドカード方式の私費専用複写機1台を設置しました。

これにより、開館時間内私費での複写が可能になりました。

図書館日誌(会議、研修)

- 6月3日 平成9年度第2回医学部分館図書・情報委員会
6日 平成9年度第1回附属図書館委員会
23日 平成9年度第3回医学部分館図書・情報委員会
25日 第44回国立大学図書館協議会総会
～26日 (京都)館長・事務部長・情報サービス課長出席
7月4日 愛媛地区大学図書館協議会総会(愛媛大学)
8日 附属図書館電子図書館的機能検討委員会(第4回)
8月1日 平成9年度農学部分館図書館運営委員会
7日 平成9年度愛媛大学体験入学(図書館施設見学・情報検索体験)
～8日
20日 愛媛県図書館講習会
27日 平成9年度図書館等職員著作権実務講習会(広島) [REDACTED]
9月3日 第38回中国四国地区大学図書館研究集会(高松) [REDACTED]
9日 附属図書館電子図書館的機能検討委員会(第5回)